

郡上八幡 Gujo Hachiman

岐阜県のほぼ中央、奥美濃地方の山中に「郡上八幡」と通称される八幡町がある。清流で名高い長良川に東から支流の吉田川が合する所に、その町は広がっている。関東に住む者にとってさほど知られていないこの町を、あえて紹介するには訳がある。そのカギは「水」である。水に恵まれた日本には、水都と呼ばれる町が多くある。中でもこの郡上八幡は、人が古くから水をいかして工夫して、生活の中に巧みに取り入れて来た伝統があり、その生活が今も息づいている町なのである。

郡上おどりの町に

大分前になるが、91年の夏8月、この町を訪れる機会があった。中旬のお盆の頃、私はすでに岐阜の飛騨地方にいて、高山市の西、清見村にある「オークヴィレッジ」という工芸村で木製の椅子を手習いで作っていた。その制作を終え清見を出る時、車の行き先を南に向け郡上八幡をめざした。すでに夕刻近くだったので、この日はたどり着ければという行程だった。飛騨と美濃を分ける有料道路を通り過ぎると、まず明宝村に入る。ここから沿道を通れる川は、吉田川となる。車の窓を開けておくと、快い瀬音が響いて来る。そう、この長良川水系の川筋の多くが護岸工事をしないままの自然の河川だという。その「せせらぎ」の音が聞こえて来たのだ。

すでに宵闇となった町に入る段になって困ったことは、あいにく宿がとれない祭りの最中にやって来たことだった。夏の郡上八幡は、一か月以上に渡って「郡上おどり」を繰り広げるので有名だ。この日は旧盆の徹夜おどりの最後の日、16日で、宿はどこも満員。仕方なく郊外に戻って、サイクリングターミナルという公共の宿のホールの一画を貸してもらい眠ることになった。

岐阜県郡上市(旧郡上郡八幡町)



郡上八幡を流れる吉田川

明けて17日、吉田川を下って町に入りこの祭礼用の駐車場だった八幡小学校の校庭に車を止めた。市街地は、東西に流れるこの川と北から合する小駄良川に沿う河岸段丘の上に広がっている。ほぼ数百メートル以内に収まっているので、歩いて回ることにした。単なる観光目的でやって来た訳でもないのに、観光案内所に寄らず、まずは役場の広報課を訪ねた。こういう場所に行くと、観光パンフも含め様々資料をくれるものである。「水」については、それだけをまとめた冊子が用意してあった。この町の水の利用には、三つの手段がある。一つが、川の上流から分水した用水。二つが、井戸からの水。そして三つ目が山際にわく湧水。役場前には、この町で水舟と呼ばれている、湧水を導いた水飲み場がある。まずはこれを一杯。喉の渇きを潤した。

街中の水を訪ね歩く

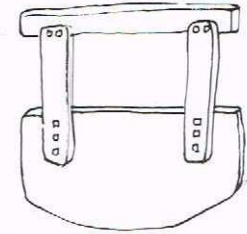
吉田川の左岸(上流から見て左)に沿って街を流れる島谷用水は2m幅の水路で、途中幾つものカワドと呼ばれる水洗い場をもち、最後は長良川沿いの水田へと流れていく。これ自体、飲めそうなほど清冽な水だが、人々はセギ板という川の流れを調整する板を使って、自宅の庭の池に引いたりしている。また水路の一部には

錦鯉や五月マスを泳がせて、水路沿いの遊歩道を行く人の目を楽しませている。祭りの最中で、ちょうちんまでがぶら下がっていた。浴衣姿の家族連れが行きかう夜の情景を思い浮かべた。カワドには簡単な屋根が葺かれており、その中にここを利用する近隣住戸の名と清掃当番の札が掛けられていた。「水」の利用が、共同体の中で運営されているのが分かる。

今度は、右岸(北側)に移って、この街の由来でもある八幡山の西側に出て、その城下の屋敷町だった殿町を歩く。ここには島谷用水のような独立した水路はなく、一見「流水」とは無縁のように見える。しかし耳を澄ましてみると、小さくサラサラ、ゴトゴトと流れる音が聞こえるのだ。そう、ふたで覆われた側溝が所々で顔を出し、そこにセギ板が置かれて分流している。どぶではなく、紛れもない小駄良川の上流から引いた北町用水、柳町用水のそれだった。

人々はここで水をすくい、打ち水をしたり、水の中にスイカを冷やしたりしている。東の山沿いには安養寺という浄土真宗の伽藍があるが、その前庭は土堀ものけて外側の道路に開かれており、ここに入出入り自由の小さな公園＝ポケットパークを作っている。ポケットパークは役場が指導しているものだ。水を活かした街づ

くりの一環として、用水から導入した小さな流れをしつらえ、その下流には細長い長方形のプ

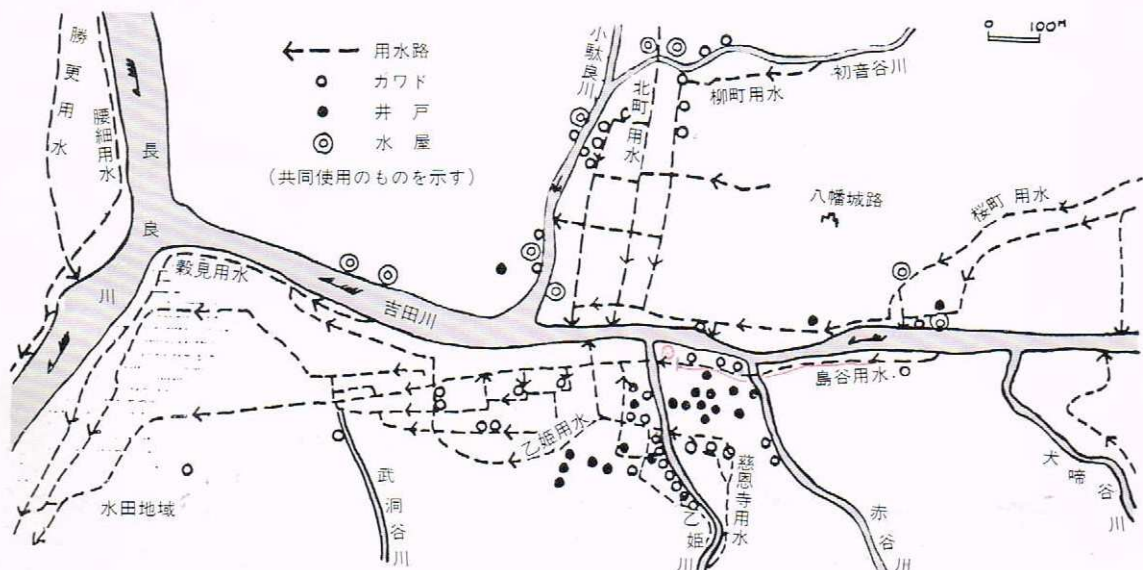


●水量を調整するセギ板
(水を利用する人が手で水路に板をついたてる)

ールを作って鯉を養ったりしている。おもしろいことに、このプールは白い花崗岩で築かれたもので、脇の坂道を下るとぶつかった道路に面して立つその壁から、勢いよく水を噴き出して滝のように流れている。なかなかおもしろい仕掛けを作ったものだと感心した。※1

さらに興味深かったのは、その西側、旧町人町の職人町・鍛冶屋町の北端「長敬寺」門前にある水路の場合だった。ここはどぶ板の覆いがなく、水路に沿って植栽も施してある。先のポケットパークに近い景観だ。ちょうど訪れた日、ここに割った竹の笕(かけい)があり、流水を水車でくみ上げてそこに流していた。道端にいた

●町なかの用水路網



おばさんに聞くと、案の定、夕べ「そうめん流し」を行ったとのこと。旧盆で帰省した近所の者が集まってにぎわったそうだ。用水をこんな形で使っている例もあるわけだ。

小駄良(こだら)川と吉田川の合流点近く、狭い石畳の通路を通って行くと、水神を祀る社(やしろ)がある「宗祇(そうぎ)水」に出る。連歌師の飯尾宗祇とこの町の縁は、15世紀にこの地を治めていた戦国大名、東野常縁(つねより)にさかのぼる。常縁は『古今和歌集』の奥義(おうぎ)に通じていた歌人であり、京都の相国(しょうこく)寺の僧侶であった宗祇は常縁に学ぼうとこの地を訪れ、近くに草庵をあんだという。これが縁で宗祇水の名がついたのだそうだ。環境庁の全国名水百選に最初に選ばれただけあって、訪れる人も多く、住民のと言うより町の管理が行き届いており、観光地に来た気分になった。

そこから吉田川の左岸に渡り返す。渡る橋が宮ヶ瀬橋で、段丘上をまたぐので水面までの高さが10m近くもある。川べりはごつごつした岩場で水深も深く、飛び込んでも怪我はしない。実際これも郡上名物の「吉田川のダイブ」を少年たちが肝試しのように楽しんでいて。一人男の子が、高岩の上から川面を見下ろしている。近くの年長の子が早く飛べとでも促しているのか、右手を何度か回転させている。そうこうしていると、ようやく吹っ切れたのか、先の少年は吉田川のコバルト色の清流にどぼーんと飛び込んだ。こんな郷愁を誘う夏の情景が、今も当たり前のように続いている町でもある。

橋を渡った辺りが町の中心で、この橋本町・稲荷町界隈が人出の多い所でもある。大通りを折れた「やなか水の小道」と呼ばれる遊歩道は、井戸水や湧水を流れに導いて、亀の噴水あり子供が水遊びできるせせらぎありで、楽しませてくれる。これに面して立つ古い町家は、現在「おもだかや民芸館」となっている。文字通り民芸品のコレクションを集めた美術館で、奥の土蔵を改装したギャラリーに入ると、勢いの良いア

ユを描いた日本画が目にとまった。この館の先代の主人、水野柳人氏の筆になるものだろう。吉田川の水が育んだ鮎が、今まさにこちらに飛び込んで来るかのようにリアルに描写されていた。



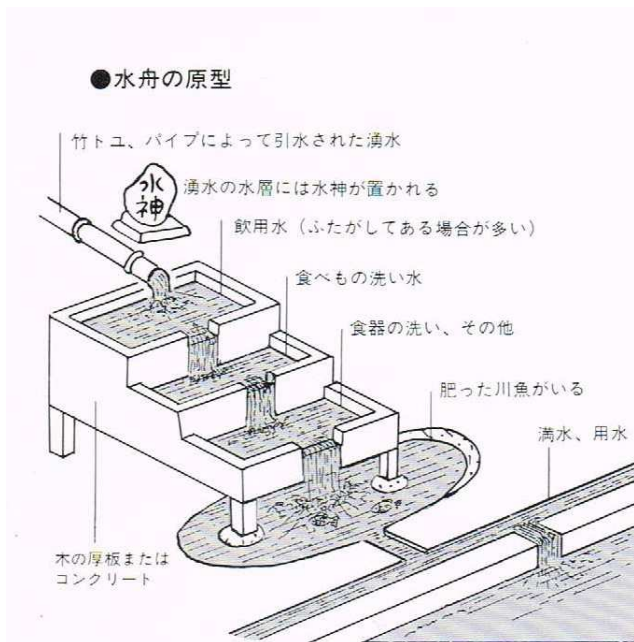
やなか水の小道

ここからさらに東南の、南に山が迫った所にある慈恩禅寺へと向かう。昼を挟んで歩き詰めで、休息をとりたかったこともあった。境内の座敷へと上がりこんだ。そこから眺めることができる「莖草(てっそう)園」という庭園の緑に癒された。もらったしおりに「池泉(ちせん)回遊式かつ座観式」と書いてあった。まさにそのとおりで、岩山と池を配した豪壮な庭を、二方に開けた広い座敷から座って眺めるようにできている。外の暑さを感じさせぬ涼気漂う空間だった。ここでも池の水はほとんど濁らず、岩の奥から出る慈恩寺用水からの瀧水が、絶えず降り注いでいた。

水舟の実際の例を探して

さすがに歩き疲れたので、慈恩寺の後はそのまま駐車場に向かった。しかしもう一つ見ておきたかったのが、現在も日常生活に使われているという「水舟」の例だった。それを探して小駄良川の西岸、吉田川沿いの集落を訪ねてみた。なるほど、この辺りでは次頁の図にあるような水舟が、ほぼそのままの形で今も使われていた。

元が湧水なので、何より水が冷たくてうまい。暑い日差しで汗をかいた体には、随分と有り難い一杯だった。



水舟は、実に合理的な仕組みで、図のように上から飲み水・ゆすぎ水・洗い水と段階を踏み、その舟を通った水を池で受けて残飯などを川魚に食べさせるという循環的な形となっている。この川魚も食膳に上らせるという事で、まことに無駄のない仕組みである。

考えてみると、明治以降近代的な上下水道が

設備されるまで、私たちの水利用の生活はこうした水舟に見られる一つも無駄にしないシステムの中で営まれて来たのではと思う。一つの川で例えてみると、川上の居住者が水を使った場合それをなるべく汚さないで川に返し川下の居住者が使えるように図って来た。こういうシステムが、瑞穂の国「日本」でどこでもありふれたものとして維持されて来たのではないか。郡上八幡の場合、その水が豊か過ぎて、あえて近代的な水道設備に頼らなくても十分、伝統的なシステムが機能して来たのでは、と思う。

小さい頃、井戸水を利用した生活の覚えがある者には、国分寺の「お鷹の道」※2で遊んだ経験のある者には、まことに郷愁を呼ぶ町である。そして至る所に水音を聞く空間というのは、ある種のワンダーランドと言った趣である。帰り際、町を見下ろす峠道を走った。なるほど町域の95%が森林というだけあって、市街地はあたかも緑の海の中に埋もれるようにあった。豊かな水には、豊かな緑が必要という教訓にも合点がいった・・・。

了

※1 残念ながら安養寺のパークは現在駐車場になり潰されている。

※2 国分寺市西元町にある野川の支流沿いの道。

